



# 座談会

小峰 光

西郷村立米小学校校長  
平成12年度～平成14年度 専門職員

佐藤 修

西郷村教育委員会生涯学習課社会教育指導員  
平成3年度～平成5年度 専門職員  
平成21年度～平成23年度 所長

原 豊子

西郷村立小田倉小学校校長  
平成19年1月～平成22年度 羽太小学校教頭  
平成26年度～平成27年度 次長

矢内 淳仁

総括企画指導専門職  
平成26年度～平成29年度 棚倉小学校教諭

渡邊 康一

西郷村立熊倉小学校校長  
平成21年度～平成23年7月 川谷小学校教頭  
平成23年8月～平成24年度 事業推進室長  
平成25年度 次長

司会 蓮見 直子次長



## これまでの セカンドスクールの成果と これからの 学校教育における可能性 ～学校と施設の視点から～



### ●金子所長

今年度のセカンドスクールはコロナ禍において実施の可能性を模索し、検討を重ねながら先生方がご苦労されて保護者のご理解をいただいたことによって、無事実施することができました。セカンドスクールを看板事業として10年間やってきましたが、今後より良いものにしていくためにはどのようにしたら良いかを考える時期であると考えております。そこで、自然の家の職員として、学校の教員としてセカンドスクールに携わってきた皆様からさまざまなご意見を伺いたいと思いますので、本日はどうぞよろしくお願いいたします。



セカンドスクール14年の経緯について説明をする  
企画指導専門職の増田直人さん

## セカンドスクールの 始まりについて

### ●蓮見次長

それでは、セカンドスクール立ち上げ当時のことから振り返っていききたいと思います。

「なすかしの森セカンドスクール」は、平成19年度から始まりますが、初年度は羽太小学校1校の参加でした。どのような経緯でセカンドスクールがスタートしたのか平成21～23年度所長でありました佐藤修さんに話を伺ってきましたので紹介させていただきます。

「長期宿泊体験により子供の“生きる力”を育みたい。  
大学生ボランティアの育成も目的のひとつでした」

### 佐藤修氏のコメント

#### ■立ち上げについて

立ち上げの背景は3つのポイントが挙げられます。

1つ目は、当施設の閑散期の利用促進方策として計画されました。特に11月、寒いだけで雪が降らない時期に利用率を上げるために、利用してもらう状況づくりを考えたという点です。

2つ目は国立青少年教育振興機構の調査研究の中に、長期の宿泊体験が子供たちの成長に及ぼす影響について公表され、文部科学省はその成果を引用していました。通常、学校の宿泊学習は1泊2日、または2泊3日が多い中、3泊4日以上で効果が表れており、4泊5日であればより効果が高く、事後の影響が継続するという結果を踏まえ、4泊5日の宿泊学習事業を自然の家が提供することを考えました。

3つ目は、全国的に社会教育の中で、通学合宿の取り組みが始められた時期でした。公民館などに寝泊まりしながら学校に通い、下校後は公民館で集団宿泊活動を行うことで、切磋琢磨したり我慢したりすることの体験を通して、生きる力を育もうという取り組みでした。

これらのポイントをもとに、自然の家ではセカンドスクール(ふたつめの学校)を企画立案しました。最初モデル校として羽太小学校が選ばれましたが、その経緯としては、以前、自然の家の専門職員として勤務経験があった古市正雄先生が、当時の羽太小の校長に就任されていたことから、モデル事業対象校としてお願いしました。

#### ■ボランティア大学生について

事業を企画した時点で、教師や職員以外のスタッフの必要性は認識していたため、大学生を関わらせてみようという議論になりました。13泊14日長期自然体験等の主催事業で大学生ボランティアは活躍しており、子供たちとともに学生自身も成長できることが認められていました。また、大学生自身が、先輩後輩の関係の中で繋がっていたので次年度の募集もしやすかったこともありました。

セカンドスクールを始めるにあたり、大学生の育成や仕

組みを参考にしたのは、静岡県の国立中央青年の家の取組でした。中央はボランティア活動のためのログハウスがあり、多くの大学生ボランティアたちは充実した活動を行っていました。中央の仕組みを参考に那須甲子でもボランティアの育成をしようということになりました。当時、筑波大学出身の業務係長であった平野吉直さんが、母校である筑波大学を通して大学生を募集した経緯があります。

長期の自然体験を実施するにあたり、ボランティアを集める場合は大学で公募するだけではなく、その大学のリーダーを通して学生を集めてもらう関係ができるようになりました。当時は筑波大学と東北福祉大学の2校から集まりました。

### ●蓮見次長

このような背景と経緯から初年度がスタートしました。平成19年度羽太小学校教頭であった原先生から、当時の学校側の様子を伺いたいと思います。

「保護者、教育者、自然の家の思いがつながり、  
一年目は羽太小からスタートしました」



### ●原校長

平成19年セカンドスクールが始まった時、羽太小学校は「里山の学習、炭焼き体験、地域に学ぶ」ということを目標に、地域に根ざした教育を推進していました。古市正雄校長から「自然の家で4泊5日

でセカンドスクールを実施したい」という話があった時、最初は「それは難しいと思います」と答えました。なぜかという、通常2泊3日の宿泊学習でさえ、準備や子供たちの指導、教員の疲労感など、限界に近い状態で学校に戻ってくるんです。それをさらに延ばすというのは…と考えていました。しかし、当時の自然の家の職員から話を伺い、「担任は夜は帰宅する」「夜は自然の家の職員と大学生ボランティアが指導する」ということでした。

また、「羽太小は今年一年限りで、来年は他校が実施する」と聞いたので、職員と話し合い、6年生19名で参加することに決めました。担任の意欲も高く、卒業を前にした6年生が、仲間意識をもてる経験をしてほしい、地域っていいな、仲間っていいなと再確認できる機会だと考えました。

実施にあたり、保護者の説明会も開きました。「やはり心配だ」「那須甲子は遠いから不安だ」という声が上がりました。しかし、私たちは「子供たちの生活力や学習力を高めたい」と主張しました。

さらに問題となったのが費用です。当時、8,000円以上の

費用がかかりました。学校行事に1人8,000円は高い金額です。いろんな意見がある中で保護者の一人が「みんな旅行に行ったらお金かかるでしょう？子供の成長のために、出しませんか？」と声を上げてくださって、最後には、保護者の方がみなさん賛同してくれました。それから何回か説明会を行い、実施することができました。

### ●蓮見次長

参加中の先生方や子供たちの様子で印象に残っていることなどを教えてください。

「体験の終わりに、子供たちが泣いていました。

別れを惜しむ涙、自分の成長を喜ぶ涙。

“来年もやってほしい！”の声がたくさん届きました」

### ●原校長

19名の子供たちには「学校を那須甲子に移す」ということを意識させました。

授業では、自然の家の職員と大学生ボランティアが、3人の子供に対し大人が1人くらいの割合でついていたので、個別学習が充実しました。これは学校では実現できないことです。生活は、交流談話棟で宿泊して教室としての研修室へ登校しました。子供たちは、学校の日課表をそのまま自然の家で進めました。親と離れる5日間、連絡を取らないことが自然の家でのルールだったので、親や子供からも連絡はしないと決めていました。中には「見に行っても良いですか？」と心配で学校に来た保護者もいました。

4泊5日を過ぎて学校に帰ってきた時の様子ですが、子供たちは大きな荷物を抱えてバスを降りてきました。5日前、親に車で送られて来た子供たちは、親に荷物を持ってもらっていました。しかし、帰りに迎えに来た親が手をさしのべると、その男の子はいいよと言って自分で担いで車に乗せました。その光景がとても印象に残っています。

19名で過ごした5日間、児童は、仲間意識が高まり、絆が強まった経験となりました。保護者からは「子供の存在の大切さを改めて感じる事ができた」という声を聞きました。また、6年生のいない学校では、在校生の意識が高まりました。6年生がいないから僕達がんばる、という姿が見られたことも学校としては大きな収穫でした。

1年間限定ということだったので終わってホッとしました。しかし、驚いたことに、子供たち、保護者から、「なぜ来年はやらないんだ」「僕たちも行きたい」という声が大きくなったのです。先生方の士気も上がっていました。そこで、来年は他校が実施対象となっていました、羽太小も継続することを希望し、次年度は2校の参加となりました。

卒業の頃に発行される学校新聞には、参加したほとんどの子供がセカンドスクールの思い出を書いていました。それほど子供たちにとっては大事なものとして残ったのだと感じました。

また、その後の学年のエピソードで印象に残っていることがあります。セカンドスクール中に担任の先生の誕生日があ

りました。そこで子供たちは、自分たちでサプライズをした  
と考えたようです。保護者が差し入れをしようとしていた  
ようですが、それは断られました。すると、子供たちと職員、  
自然の家のレストランスタッフと話し合い、なんとケーキを  
作っていただいたのです！それで担任の先生の誕生会を開  
いたというエピソードがとても印象に残っています。子供た  
ちにとっても、担任にとっても忘れられない思い出になり  
ました。

#### ●蓮見次長

ありがとうございました。羽太小学校が実施した後、自然の  
家ではどのように受け止めていたのか、佐藤さんにお話を  
伺っているので紹介します。

#### 佐藤氏のコメント

羽太小でその効果の手応えをつかんだ後、もう少し規模の  
大きい学校で展開したいと考え、当時2、3クラスあった  
米小を対象校としてお願いし、2年目となりました。それで  
成功すれば村全校に広がるだろうと考えていました。  
ここで重要だったのは、西郷村の教育委員会です。当時の  
教育長である加藤征男さんが非常に協力的な姿勢でした。  
「そんなに良い事業なら、2校だけでなく全ての学校で同  
じプログラムで体験を提供してもらえないか？」という提  
案がありました。

しかし、学校側としては抵抗もあったと思われます。学校  
を説得する際に役に立ったのが、国立青少年教育振興機構  
の調査研究結果でした。宿泊数が長いほど教育効果が高い  
というデータを活用し、先生方や保護者への説明を行いました。

また、長期宿泊の中で、年代の違う大人との関わりが、子供  
の新たな一面を引き出していることが分かってくると、先  
生方もだんだん前向きになっていきました。

しかし、「学校行事」の時間だけで実施することは難しく、  
教科時数が削られる可能性がありました。ところが、セカ  
ンドスクールでは、教科として扱える部分が明示されたの  
です。体験活動が、体育や理科、社会の教科としてのねらい  
に沿って実施することができたことは先進的だったと思  
います。

## セカンドスクールの自然の家の 看板事業にともなう普及について

#### ●蓮見次長

平成23年度より、西郷村全5校で実施となりました。自然  
の家で事業推進係長や室長、次長を歴任した渡邊先生から自  
然の家における当時の方針や職員の思いなどについてお話を  
伺いたいと思います。

「東日本大震災の年は大ピンチの手探り状態。  
企画指導専門職とボランティアの熱意で実施できました」



#### ●渡邊校長

私は平成21年～23年7月  
まで、川谷小の教頭として赴  
任していました。

東日本大震災の後の8月から  
自然の家へ異動となりました。  
先ほどの原先生のお話を伺  
い、懐かしく思い出してい  
たところです。

平成21年、川谷小勤務の時、佐久間芳雄校長から、学校経営  
について相談がありました。当時の自然の家所長の佐藤修さ  
んからセカンドスクールを川谷小で4泊5日やってほしい  
という話があったそうです。先行実施していた学校の評判が  
大変良かったので、実施できる方法を探っていました。大き  
な問題は、保護者と教員の理解です。平成22年度、最後の授  
業参観で4年生の学級懇談会の時、当時自然の家の室長で  
あった箭内貞男さんと企画指導専門職に来ていただき、具  
体的な説明をしていただきました。すると、保護者全員から  
「やってほしい！」という声が上がリ、次年度の5年生が初  
めて実施する運びとなりました。当時の企画指導専門職のリー  
ダーであった赤澤敏樹さんに担当になっていただきました。  
しかし、平成23年3月に東日本大震災が起り、自然の家  
は避難者の受け入れを行いました。

私は、平成23年8月1日に途中人事でこちらに来たわけ  
ですが、当時は被災した子供たちを受け入れるリフレッシュ  
キャンプを実施していました。多忙な上にいろんなボラン  
ティアが来ていたので、誰が誰だか分からないまま一ヶ月は  
困惑していました。それがようやく落ち着いた9月。各学校  
からの依頼もあり、セカンドスクールの受け入れ準備を始め  
ようという話になりました。原発の問題もあり、ボラン  
ティアの募集もピンチ。しかし前年の先輩とつながりのある人達  
が来てくれました。本当に、今のコロナと同じで、手探り  
状態でしたね。

またこの年は、個性豊かな4人の企画指導専門職が揃いま  
して、非常に楽しいものになりました。原発事故による放射線  
の問題で野外活動を制限することもありましたが、社会体験  
として大内宿に行ったり、甲子山に登山に行ったり、いつも  
とは違った体験ができて、子供たちは喜んでいました。その  
時々合ったもので進めていくことの大切さが分かりまし  
た。私としては、学校や保護者にセカンドスクールの効果を  
きちんと説明したいと考え、子供たちが滞在中はほとんどの  
活動に参加しました。

また、ボランティアを育てることに力を入れた時期でし  
た。そこで大切なのは、ボランティアに寄りそう姿勢だと感  
じました。研修会はもちろんですが、懇親会や飲み会も多く  
やりましたよ。最後にはお礼に写真のプレゼントを用意し、  
感謝の気持ちを伝えました。

ボランティアで大事なものは、次につなぐということ。大学に  
伺って、セカンドスクールの説明や授業もやりました。信州  
大学や東京学芸大学、昭和女子大学、福島大学にも行きまし

た。いろんな大学で学生と話をすることが楽しかったですね。一番面白かったのは、終わったあとの反省会。その時に出会った学生が教員を目指す姿を見るのも嬉しかったです。また、私が在籍中は、職員たちが子供たちと一緒にサプライズを考えるとということも定着していました。担任の先生が涙を流している姿を何度も見ました。

今、私は熊倉小にいますが、セカンドスクールの思い出は子供たちにとってとても大きく、教育的効果も大きいです。今では、村内の小学校では、入学式や卒業式に自然の家の職員を来賓で呼ぶことになっていますね。お世話になった方に、晴れ姿を見てもらいたい、改めて感謝の気持ちを伝えたいという子供たちの思いがあって始まったことでした。そういった新たなつながりを作ることもできました。

### ●蓮見次長

ありがとうございました。避難者受け入れから実施が難しい中でのセカンドスクールに向けての準備のエピソードは、とても印象深いです。

さて、渡邊先生の後任の次長をされたのが原先生でした。この頃には白河市の表郷小や棚倉町の小学校へと参加校が増えていきましたので、その経緯を教えてください。

「西郷村だけでなく、白河市、棚倉町の小学校へ。  
各校によって多様なプログラムが展開されました」

### ●原校長

私は平成26年～27年に次長としてこちらに勤務しました。この頃は、西郷村の小学校だけでなく、参加校が増えました。村外の小学校に広がっていくのは素晴らしいことだと思いました。これはおそらく小規模校からスタートし、小田倉小などの大きい学校での活動の成功があったのだと思います。

自然の家在籍中は、長期滞在学习の重要性がうたわれていた最盛期でしたが、特に棚倉町ではキャリア教育を推進していました。子供たちが企業の職業体験をするというプログラムに大変感心しました。キャリア教育につながる視点から、棚倉町はセカンドスクールの申し込みに至りました。棚倉町では國學院大学の教授を招いてキャリア教育の講演を行っており、当時の棚倉町教育長も大変協力的でした。社川小学校、高野小学校、近津小学校、山岡小学校が参加しました。

また、平成26年度は、自然の家としては震災からの「復興」を意識した年でした。当時自然の家利用者が7万人まで減少していたので、12万人を目指して頑張ろう！と取り組んでいました。その成果もあって11月以外の予約が埋まりました。棚倉町のセカンドスクールはどの時期に実施できるかというスケジュールを組むことが困難でした。夏休み終了直後は、セカンドスクールの日程確保と、施設全体の利用者増を図ることに大変苦労しました。

### ●蓮見次長

棚倉町が参加してきたことで、普及という段階になりましたね。

### ●渡邊校長

棚倉町で始まった経緯には、表郷小から異動になった佐川幸信校長の存在が大きかったと思います。セカンドスクールの評判はすでに校長会で広まっていたので、佐川校長は棚倉小でも取り組みたいという意向がありました。いろんな問題はあったのですが、まずは3泊4日でやりたいという話でした。

また、セカンドスクール中は学校の先生はスクールタイム終了後、帰宅するのですが、初めてで心配だから泊まらせてほしいという希望が出ていました。また平成25年頃には、自然の家で段取りから運営まで手厚い支援を行っていたのですが、これからは学校が自立してやれるような事業にしていきたいという話も出ていました。

### ●蓮見次長

今、棚倉町の実施経緯を伺いましたが、ここで、実際に棚倉小で教員であった矢内企画指導専門職が担任としてセカンドスクールに参加した際のお話を伺います。教員として参加した感想や実際の様子などをお聞かせください。

「教員をサポートする。ボランティアを育てる。  
経験を通して企画指導専門職の役割が見えてきました」



### ●矢内企画指導専門職

私は平成26年度から棚倉小に勤務し、3年目の平成28年度に5年生の担任となりました。

当時は、佐川校長先生が「セカンドやるぞ。セカンドは学生が良いんだ」と言っていたことが印象に残っています。

当時5年生は3クラスあったのですが、なかなか詳細が分からず苦労しました。そこで下見に行こうということで、大内宿で地層を見たり、阿武隈川の源流を見たりして、朝から晩までかかってようやく学校に帰ったことを思い出します。

棚倉小は特別支援学級もありましたので、特別支援学級の児童をどうするかという課題も話し合いました。実際にやってみると、授業をやったという記憶があまりなく、いろんなところに行ったという日程でした。日中、私たちはいたけれど、夜、ボランティアや職員さんと過ごしている様子がいまいち分からない。そして子供たちは帰る時に号泣しているわけです。正直、これをどう評価したら良いか分からないという印象で1年目が終わりました。

翌年も5年生の担任となり、校長から「セカンドを頼む」と言われ、内容の見直しをしました。那須甲子職員と打ち合わせ

を重ねたのですが、学校の教育活動と那須甲子の自然体験を結びつけていいんだ！というところで腑に落ちて、カリキュラムマネジメントを行ったことで、印象がガラリと変わりました。

ボランティアのことも事前によく打ち合わせをしましたね。ボランティアにどのような役割をお願いできるのかを考え、児童の様子を朝晩申し送りをしたり、子供たちの宿題への取組ませ方を確認しました。

棚倉小は、他の行事の兼ね合いもあり2年間で終了してしまいましたが、私としては2年間の経験による収穫は大きいものでした。

企画指導専門職として関わらせていただいて、今考えることは、1週間を費やして場所を移動して教育課程を進めるということは、他の学校行事等ではまずありえません。そのため、長期を見通して計画することは、非常に重要だと考えています。この活動を経て、教員(指導者)を支えるという考えが生まれました。今後も各学校の実態にあったサポートをしたいと思っています。

## セカンドスクールの活動とその効果について

### ●蓮見次長

小峰先生は、セカンドスクールスタート以前に、自然の家専門職員として勤務されていました。現在、米小学校の校長としてセカンドスクールの企画運営に積極的に関わっていただいております。施設を利用した学校教育活動についてのお考えをお聞かせください。

「自然の家という広大なフィールドで五感を使い、  
学びの連続性を生み出す新たなプログラムを」



### ●小峰校長

自分自身がここで働いていたのは、18年も前になりますが、文部事務官からの切り替え時期に2年間在籍したことは良い経験でした。当時を振り返ると「国立は、先導性・先進性が求められる。これを国立がやるからこそ、県立が追いかける。県立と同じことをしているようではいけないよ」と、青少年活動教育の先駆者の先輩方からご指導いただいたことが思い出されます。

長期宿泊体験活動では、そこで自分たちに見合った、自分たちの意図がきちんと伝わるようなボランティアを育てることも大きなテーマでした。こういう意味でも先導性・先進性をいくセカンドスクールの考え方は合っていたし、他ではな

かなかできないことだと思います。それも西郷村と自然の家が手を取り合ってやるというのは、お互いの相互理解ができてできることなんですね。それを長きにわたって活動を続けていられるのは、みなさんの思いがあつてのつながりなんだろうと感じています。

セカンドスクールの長期宿泊体験活動では、やはり「人と人との関わり」がポイントとなってきます。時間が経てば、自我がでる。我慢できなくなる。自分が出てくる。その時に先生や職員、ボランティアの人に話したり、話を聞いたりする。そういう人とのつながりが成長に関わってくるのです。特に、親や先生と自分たちのちょうど間くらいの世代であるボランティアの存在は大きいですね。ここでは親に頼らず、この体験を通して乗り越える力を身に付けていきます。いつもの仲間とのつながりだけでなく、いろんな人との関わりによって、今までとは違う学校では見られない仲間の絆が生まれます。

学校と施設の関わりは、50:50の関係だと考えています。自然の家に全てお任せではなく、先生が背負いすぎることなく、お互いが歩み寄りながら、協力しあってメリットを生み出していく。学校は教育目的のために、施設は経験値としてお互いが話を進めていくことが良いと考えます。

また、セカンドスクールは活動ありきではなく、デメリットや反省も踏まえて、年度始めの4月から話し合いを重ねることで、よりよいものを作り上げていこうと相互努力をしていく必要があります。施設の利用については、自然の家から新しい提案を出していただき、学びを意識した活動の充実を求めます。学びを作り上げる活動によって、有意義な教育事業になることを願っています。

外部講師との連携では、今まで学校で学習してきたことが、自然の家で体験することで、深い学びに通じるのではないかと考えています。私たちの頃は、宿泊学習をやるにあたって、当然事前に何ヶ月も前から準備するし、野外炊飯やなたの使い方も自分たちで体験しました。だけど今の先生は、そういう経験値がなく、子供と同レベルでここに来ます。それでは指導は難しいでしょう。それを補うのが自然の家の職員の力だと思います。

子供たちは、学校での教科指導プラスαの体験を行うことで、主体的、多様な学びにつながっています。ただ体験することが良いのではなく、それによって起こったこととの関連を見出すこと、反省や思考を重ねることが重要かと思っています。

プラスαを補うというのは、自然の家の方々の指導によって先生のフォローをしていただくことも、それにあたります。ここから外に出る活動もありますが、それだと一日かかってしまう。塔のへつりに行ったり、買い物をして社会体験をしたりするというプログラムもありますが、そこに教育的価値はどのくらいあるのでしょうか。観光旅行との違いは何だろう？と考えてしまいます。自然の家のバスを借りて遠くに出かけるのではなく、ここで何をするのか。教育の本筋を作る

ためにも、価値あるプログラム編成は、職員の力によることだと思えます。

ここで、セカンドスクールによって生まれる「学びの連続性」の話をしていきましょう。学校での教育だけでは、まかないきれないところがあります。ここでは、時間を弾力的に使うことができる。自然環境、人的環境を生かすことができるから、学びの連続性が生まれるのですね。自然の家の力を借りて、教員、支援スタッフの力や、130万㎡という自然フィールドを生かしていくことが良いのです。

たとえば、社会科の森林学習があります。郷土には7割の森林がある。それが自然と生活がどう関わっているのかを学ぶのですが、実際に子どもたちは森林を経験したことがない。そこで今年は、平成の森をフィールドにして、森の中を水が流れる音、木肌に触れる感覚、鳥のさえずりや、落ちている枯葉を踏んだ音、そのようにして五感で体験したことは、大切な学びであったと考えます。

校長会では「流れる水のはたらき」のプログラムを整える話をさせていただきました。ただ単に上流から下流に流れるということだけでなく、自然の働きへの理解が深まるのです。また、三菱製紙さんにもご協力いただいて作成した「私たちの生活と森林」のプログラムは、「森にはいろいろな森がある。3つの種類がある。切っていい森、切っていけない森、切らなければならない森がある」という話がありました。そして切ってはならない森が、平成の森だと話され、そこで学習してきて、紙づくりへとつながっています。学びの連続性のひとつの例です。学校ではできない学びで理解をより深め、主体的であり、変容的な学びになっていくのだと改めて思います。

今年、米小は3泊5日(3泊4日は自然の家で過ごし、4泊目は家庭に戻り5日目のみ米小学校を会場とした。)という変則的なかたちでの実施でしたが、効果の面では充分であったと捉えています。子供の成長を見てとれましたし、新しい発見もありました。また保護者も我が子を外に出してみても、改めてその大切な存在に気づき、親としても心の成長が生まれたのかなと実感しました。

また、子供の心を動かすスタッフの対応ですね。その人の人間性や、子供への言葉のかけ方でも影響を与えるのです。最終日に子供たちの多くは涙を流しますが、どういう涙なのか重要です。子供たちになぜ泣いてるの?と聞くと、支援スタッフとの別れが悲しい、つらい、成長できてうれしい、大学生の言葉に感動したという子供がいました。涙には種類があるんですね。成長できてうれしいという実感を自分ができるということは素晴らしいと思います。人を成長させるのは、やはり人なんです。

今後、セカンドスクールが継続していくためには、内容が重要だと考えます。今年の会議で原先生は「もう一度原点回帰しよう」とおっしゃいました。私は自然の家のメリットを生かしたプログラムを考案しました。メリットもあるしデメ

リットもありました。しかし、川の流れを理解することによって、中学校での学習理解が深まる。それが、西郷村のすべての子供たちが同じ認識を持ち、中学校に行く。それが今までできなかったことでしたので、新しい取り組みとして良い例を築くことができたかなと実感しています。

#### ●蓮見次長

人と人との関わりが成長につながるというお話をいただき、改めて共感しています。今年度のテーマであった教科と結びつけた体験活動が新たに始まり、プログラムの向上が図れたと感じています。これまでのプログラムについての感想があればお願いします。

#### 「共通プログラムが完成したことは、これからのセカンドスクールの道しるべになるでしょう」

#### ●原校長

セカンドスクールが始まった頃に、課題の多い学年が行ったことがありました。座って授業を受けられるか心配でしたが、子供たちは目を輝かせて学習に取り組んでいました。担任の先生が「この子たちにもできるんだ!」と感動したと話していたことを思い出しました。その子供たちが学校に帰ってきたとき「セカンドスクール楽しかった!勉強しなかったもんね」と言ったんです。勉強しているはずなのに、学校での勉強とはイメージが違うという正直な感想なのでしょう。私はそれで良いのかな?と気になりました。

そこでセカンドスクールの原点に戻り、学習力と生活力を掲げることで、体験活動のプログラムを見直していく必要があると考えているのです。今年は共通プログラムでやらせていただきましたが、体験活動が充実してくると、学習力は上がると実感しました。効果としては、自然の家の環境を生かしたプログラムはありがたいです。また、「つなぐ」というのもひとつのキーワードで、5年生でセカンドスクールを体験し、6年生のチャレンジスクール(西郷村全5校の合同宿泊学習)へとつながっていただけらなと考えています。1年経つと、シーツの敷き方が分からない、野外炊飯の仕方を忘れてしまった。そうではなく、次に体験させることで身に付けていくというように、つながりのある活動ができれば良いと思っています。そして、学校の特色によってプログラムはさまざまなので、その学校に合うカリキュラムを入れていくことが、これからのセカンドスクールの可能性を広げていくと考えています。

#### ●渡邊校長

統一したプログラムができたことは、大変良かったと思います。今も大事ですが、校長や担任が替わっても、持続できることが大きなメリットですよね。また、学校と自然の家職員のつながり、連携の成果が出たと感じています。子供たちに感想を聞くと、「自分たちで時計を見て5分前行動ができるよ

うになった」、「自主的に行動することで活動が広がった」という声がありました。

また、特別支援学級の子との関わり方について、どう声をかけるか、コミュニケーションの取り方を学んだ子もいました。これは学校ではなかったことなので大変良い機会を得たなと感心しました。大学生との関わりに影響を受け、福島大学を目指したいという声もありました。

保護者からは、「家の手伝いをするようになった」、「我慢ができるようになった」、「友達との関係が良くなった」という感想がありました。担任からは、「施設のサポートがあったので、負担を減らすことができた。その分、子供の様子をしっかりと見ることができ、指導に専念することができた」という話がありました。

## セカンドスクールの可能性について

### ●蓮見次長

最後に、セカンドスクールの可能性や自然の家に期待していることについてお話をお聞かせください。

### ●矢内企画指導専門職

私はいわき市出身で、県南の歴史やセカンドスクールについてはここで学ばせてもらった経験は貴重なものだったと実感しています。先ほど小峰先生がお話された「子供たちが泣けばいいのではない」という言葉で思い出したのですが、担任として引率をして帰ったとき、他の先生に「なんで子供たちは泣いてるの?」と聞かれ、明確に答えることができませんでした。その悔しさが残り、考えてきました。子供たちが、この経験をいかに今後の生活に生かすかが私の目標です。セカンドスクールは魔法の事業と言われますが、そうじゃない。だけど、きっかけになる。子供は家庭に帰るものなので、セカンドスクールで終わってしまっただけなんです。泣いたことを感動体験として終わらせるのではなく、成長ととらえ、これからの生き方につなげていくことが大切なんです。ぜひ今後も、企画指導専門職と担任の成長を図っていきなさいと思いますし、そのためには指導者の上に立つ校長先生方の力が必要だと考えています。

### ●小峰校長

教育をつくっていくのは人です。人をいかに育てるのは、とても大切なことです。先生方の意気込みが間違いなくセカンドスクールに表れる。後ろ向きではそうなるし、前向きならスタッフが気づいてずっと入ってくれる。身になる教育をしていくためには、体験できれば良し、ではなく、させるからにはより良いものをやりましょう、という話し合いが必要なのです。セカンドスクールで大切なのは、事前と事後の報告です。来年度につないでいくために、しっかり連携してほし

いと思います。

また、子供たちに生活のリズムを作らせることも目的のひとつです。ここで過ごすことで、子供たちの精神的安定につながり、大きな価値があるわけですが、それもこの自然があったことなのだと思います。この自然の中で、子供たちは学校では見せない姿を見せてくれるでしょう。

### ●原校長

今年の子供たちは、号泣でした。素直に泣けてよかったと思いました。他の校長先生にもセカンドスクールのことを伝えてきたのですが、学生との楽しい思い出でとどめてはいけないですね。「5年生になったらセカスクに行く」を合言葉にそこに向かって意識を変えています。

今年はこのコロナで葛藤がありました。関東からスタッフさんが来るとという不安もありましたが、あのスタッフさんだからこそ良い経験が生まれたんですね。本当に感謝しています。

子供たちは、自立、協力、耐性、家族愛、規律を守るといったことを身に付けて学校に戻っていきます。この経験はぜひイベントとしてではなく、教育としてつなげてほしいと願っています。自然の家が「生きることを学ぶ場」として利用されていくこと、「セカスク」が繁栄していくことをますます期待しています。

### ●渡邊校長

今年度はまさに「成長」を目指して、学校運営を行っています。熊倉小では、4年で森林学習会、5年はセカンドスクール、6年は合同宿泊と連続した体験をしています。子供たちは自然の家の職員たちに魅力を感じ、ここで仕事をしたいと思う子供もいます。そういう魅力のある人を増やしてほしいですね。

いま、不登校やいじめ、発達障害というさまざまな課題があります。その中でセカンドスクールの自然体験や大学生との関わりによって、そうした課題が解決され、良い方向に進むのかを考えていきたいですね。今後も5校全校が利用できるよう、努力したいと思います。



### ●蓮見次長

ありがとうございます。今後も教育プログラムは常にブラッシュアップしていかなければならないと感じました。職員やボランティアの指導にも力を注いでいこうと思います。セカンドスクールは看板事業として10年間

掲げてきました。このノウハウを基に今後も発展していけるよう努めてまいります。本日は貴重なご意見をありがとうございました。



# おわりに

## ～セカンドスクールの軌跡と奇跡～

平成18年度に国立青年の家、国立少年自然の家が統合され、ここ那須甲子は「国立那須甲子青少年自然の家」となり、その翌年度から取り組んできたセカンドスクール。

今年度、西郷村立小学校5校のうち3つの小学校長に当所職員を歴任された方が揃い、セカンドスクールをより一層の連携協働をもって進めることができました。

この14年間の軌跡は、人のつながりという奇跡も相まって、今回このような報告をさせていただくことができましたことをとても嬉しく思っています。

報告書では、14年間の振り返り、関係者による座談会を企画しました。そこでは、当時の教員や担当職員が子供たちのために目の前の課題に奮闘してきた実態やエピソードが語られ、私たちはその重みを実感することができました。また、特に今年は、コロナ禍において子供の学びを止めない！という先生方の強い意志と努力、自然の家との協働体制なくして実施することはできませんでした。改めて、14年に及ぶセカンドスクールに関わっていただいた全ての方々に、心より感謝申し上げます。

自然の家は、これまでより一層、皆さんによりそい支援していく存在となるため、体験し学ぶ機会を提供し続ける責任と意志をもって、前に歩み続けていきたいと思えます。

国立那須甲子青少年自然の家 次長 蓮見 直子

## SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



令和2年度国立那須甲子青少年自然の家職員

所 長 金 子 豊  
次 長 蓮 見 直 子  
主 幹 大 野 秀 幸

総括企画指導専門職 矢内淳仁  
企画指導専門職 江口俊文・海野裕太・増田直人  
事業推進係主任 湯川 枢  
事業推進係 岩谷 香・古谷洋祐・横屋 周・高橋旺子・藤本 樹・白石幸子・橋本 薫  
総務・管理係長 白岩 悟  
総務・管理係主任 石黒奈々  
総務・管理係 矢吹幸男・穴澤清一・仁平 隆

協力 研修指導員 三村 正・高田雅雄・菊池清二  
エコシステムアカデミー  
那須平成の森 インタープリター  
棚倉土木事務所  
なすかしの森レストラン

発行日／令和3年3月

発行者／独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立那須甲子青少年自然の家  
〒961-8071 福島県西白河郡西郷村大字真船字村火6-1  
TEL 0248-36-2331 FAX 0248-36-2150 <https://nasukashi.niye.go.jp/>

印刷／ふじ印刷株式会社

== いつもと違う環境の中で ==

パーセンド

100%鮮度の原体験

国立那須甲子青少年自然の家



National Institution For Youth Education  
独立行政法人 国立青少年教育振興機構